

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20401048

研究課題名（和文）人間と動物の関係をめぐる比較民族誌研究：コスモロジーと感覚からの接近

研究課題名（英文）A Comparative Ethnographic Study on Relations Between Men and Animals : Approach From Cosmology and Sense

研究代表者

奥野克巳（OKUNO, KATSUMI）

桜美林大学・人文学系・教授

研究者番号：50311246

研究成果の概要（和文）：地球上の幾つかの生業を異にする社会を取り上げて、文化人類学的な参与観察とインタビューを組み合わせた調査手法をつうじて、とりわけ、人間が動物をコスモロジカルにどのように表象しているのかに焦点を当てて、人間と動物をめぐる関係について考察した。

研究成果の概要（英文）：This research project explored relations between men and animals, especially focusing on how people cosmologically represent animals in various societies in the world depending upon different subsistence economy, by making full use of anthropological research method consisted of both participant-observation and interview.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2009年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2010年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
総計	12,500,000	3,750,000	16,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：人間と動物、人類学、民族誌、フィールドワーク

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 人類は、周囲の自然環境における多様な生物資源を利用して生き延びてきた。動物は家畜化され、屠畜され、人類は、やがて食糧を安定的に手に入れるようになった。そのプロセスは、その後、商品経済へと組み入れられ、動物は飼育・屠畜され、食肉加工されて食卓へと運ばれる。人類は、自然界のたんなる一員からそれを支配する存在として自らを位置づけるようになり、知識と技術を用いて、スポーツ狩猟、毛皮交易、動物実験や見世物および観察の対象として、動物を取り扱うようになった。20世紀後半には、人間に残

酷な扱いを受ける動物に対して哀れみを感じた人たちは、動物にも本性に従って生きる権利があるとするアニマル・ライツを唱え始めた。

人間は、生活資源としての動物に対して、動物の生殺与奪の権利を手に入れたのである。そのようなヒト中心主義的な動物観は、今日、グローバル化による生物資源の世界的な需要の高まりとも相俟って、地球上の各地で、人間と動物の間に、様々な現実的課題を生み出している。

他方、人間の利益を優先している点で同じくヒト中心主義的ではあるが、自然や動物に

に対する畏怖に支えられて、「人間の非人間的世界への比喩的投影による拡大認知」という特徴をもつ、人間の動物への態度のモデルがある。それは、ふつうは、人間の生存のための動物の殺害という撞着を身に受けながら、自然を擬人化したり、動物との交渉を行ったりするような宗教や儀礼、生業実践などとして現れるものである。文化人類学は、これまで、そうした自然観・動物観の記述と解明に努めてきた。それだけでなく、人間と自然の関係を、人間の感覚（視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚）の観点から取り上げてきた。本研究では、(1)人間のコスモジカルな動物との関わり、(2)感覚をつうじた動物との関わりや動物への態度などを記述考察し、グローバル化に伴うその関係のあり方の変容を視野に入れて、人間と動物の関係のあり方に関して、比較民族誌的な調査研究を進めることを構想した。

(2) 周囲の自然を相手に人間がどのように暮らしてきたのかについては、生態人類学による研究蓄積がある。池谷は、カラハリのサン社会では、食糧獲得のための狩猟から、肉や毛皮を販売するための商業狩猟へと移行しつつあることを明らかにした。秋道は、中国とラオスの少数民族社会で、野鶏が、食糧として重んじられる一方で、焼畑民社会では害鳥とされていることを明らかにした。

そのような研究に対して、文化人類学は、これまで、人間が動物をコスモジカルにどのように表象するのかに着目して、人間と動物の関係を上げてきた。レヴィ＝ストロースは『野生の思考』のなかで、人間が、動物と親密な関係をもって世界を組み立て、命名することで、自然にとりまかれ、交渉しながら、暮らしていることを明らかにした。ダグラスは、レレ社会の豊穡多産を祈願する儀礼で、センザンコウが多用される理由を考察し、それが、分類体系から逸脱する変則的な動物であるがゆえに、「神秘的な力＝生殖力」を与える象徴とされていることを明らかにした。国内では、動物をめぐる文化の諸相についての研究成果が公表されてきている。

文化人類学はまた、感覚の民族誌研究において、人間と動物の関係へと接近してきた。匂いを世界の中心に位置づけるアンダマン島民は、身体に粘土を塗って匂いの発散を防いで狩猟に出かける。生きている動物に仲間の殺害を知らせないために、捕獲した動物から匂いを奪った後に殺害する。サラワクのプナン社会では、神のお告げとして、鳥の声の聞きなしが盛んに行なわれてきた。さらに、居住空間の内外に家畜などがどのように配置され、人間集団とどのような関係にあるのかについても取り上げてきた。

本研究は、当初、この領域をリードしてき

た生態人類学の研究に対して、理論的には、コスモロジーと感覚に関する研究蓄積をベースとして、手法的には、人びとの実践と言説の両面に重視する文化人類学の観点から、人間と動物の関係をめぐる調査研究を前進させることを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、生業を異にする幾つかの社会を取り上げて、それらの社会における人間と動物の関係の諸相に関して調査研究を進めることであった。人間は、神話や昔話のなかで、動物をどのようなものとして捉えてきたのか。宗教実践や儀礼、禁忌などをつうじて、動物にどのように向き合ってきたのか。生業との関わりにおいて、動物はどのような存在として扱われるのか。さらには、感覚をつうじた動物との接触、生活空間での配置などについても明らかにする。また、開発や商業的な森林伐採などによる自然・社会環境の変化によって、住民と動物たちとの関係はどのように変わったのか。商品経済の浸透によって、人びとは、周辺の動物とどのように新たな関係を築いているのか。そうした人間と動物の関係の諸相の現在に関するものも明らかにしようとした。その後、各地での研究成果を比較検討して、現代社会の人間と動物をめぐる関係について、新たな見方・捉え方を提示することを目指した。

## 3. 研究の方法

これまで長期調査の経験がある文化人類学者が、各自のフィールドにおいて、人間と動物をめぐる関係の諸相について調査研究を行った。そのさい、各社会の既往の人間と動物の関係が、商品経済の浸透やヨーロッパから発信される価値観などの浸透によって、どのように変化したのかという点についても視野に入れる。具体的には、7つのフィールドにおいて、まずは、最初の3年間で、人間と動物をめぐる民族誌を完成させる。その上で、4年目には、それらの民族誌を比較検討し、ヒト中心主義的な構成から成る、現代世界の人間と動物をめぐる諸相と照らし合わせて、人間と動物の関係について、包括的な検討を行うとした。

## 4. 研究成果

本研究の研究期間にわたって蓄えられた各研究メンバーの海外調査研究のデータを比較検討するなかで、「駆け引き」というミクロな場面における人間と動物の相互交渉の多様なあり方を記述考察することをテーマとして、まとめの作業を行った。本研究の成果として、2011年9月30日付けで、『人と動物、駆け引きの民族誌』を出版刊行した（奥

野克巳編著、はる書房)。

その書のなかで、とりわけ、ミクロな交渉場面において、人間と動物の関係のあり方が多様であることが照らし出されたことになる。本科研の成果は、人間と動物の関係をめぐって、国内外において、近年盛んに行われてきている研究の動向(国内では、岩波書店の「ヒトと動物の関係学」シリーズや、吉川弘文館の「人と動物の日本史」シリーズなど)に対して、人類学からの貢献となるだろう。

本研究で明らかになったように、人と動物の「駆け引き」の多くは、狩猟・供犠・闘牛・動物実験などの「動物殺し」を伴うものである。本研究を継承しながら、とりわけ、「動物殺し」に焦点をあてて、本研究と同様の比較民族誌の観点から調査研究するために、平成24年度から、科研費基盤研究(A)「動物殺しの比較民族誌研究」をスタートさせる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①奥野克巳 名前と存在：ボルネオ島・プナンにおける人、神霊、動物の連続性 文化人類学 有 76(4) 2012 417-438

②シンジルト 家畜の個性性再考：河南蒙旗におけるツェタル実践 文化人類学 有 76(4) 2012 439-462

③池田光穂 「自然」の二重性：神経科学の実験室における動物と研究者 文化人類学 有 76(4) 2012 474-484

④Katsumi Okuno Natural Disaster, Men and Animals among the Penan: Beyond "Thunder Complex" マレーシア研究 有 1 2012 59-72

⑤シンジルト 牧畜民にとってのよいこと：セテル実践にみる新疆イリ=モンゴル地域の自然認識の動態 中国 21 無 34 2011 135-162

[学会発表] (計8件)

①田川玄 人間と動物の駆け引き 日本文化人類学会 2011.6.12. 法政大学

②吉田匡興 クスクスを狩る経験：パプアニューギニア山地民の動物経験の一断面とその文化的・社会的意味 日本文化人類学会 2011.6.12. 法政大学

③西本太 いたぶる快楽：ラオス山地民カン

トゥのスイギウの殺害 日本文化人類学会 2011.6.12. 法政大学

④花淵馨也 牛を屠り、牛と遊び、妖怪牛にとり憑かれる：コモロ社会における動物と人間との関係性について 日本文化人類学会 2011.6.12. 法政大学

⑤奥野克巳 人と動物、まみえず 日本文化人類学会 2011.6.12. 法政大学

⑥奥野克巳 ボルネオ島狩猟民プナン社会における動物と人間：近接の禁止と魂の連続性 日本文化人類学会第44回研究大会 2010.6.12. 立教大学

⑦シンジルト 聖なる動物が解き明かす自然と人間の関係：個性性、日常性、持続性 日本文化人類学会第44回研究大会 2010.6.12. 立教大学

⑧池田光穂 「自然」と「文化」の境界面：神経生理学研究室の事例検討 日本文化人類学会研究大会 2010.6.12. 立教大学

[図書] (計1件)

①奥野克巳、吉田匡興、西本太、シンジルト、花淵馨也、田川玄、池田光穂 はる書房『人と動物、駆け引きの民族誌』 2011 274

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

奥野 克巳 (OKUNO KATSUMI)  
桜美林大学・人文学系・教授  
研究者番号：50311246

##### (2) 研究分担者

シンジルト (SHINJILT)  
熊本大学・文学部・准教授  
研究者番号：00361858  
(H22→H23：連携研究者)

田川 玄 (TAGAWA GEN)  
広島市立大学・国際学部・准教授  
研究者番号：70364106  
(H22→H23：連携研究者)

花淵 馨也 (HANABUCHI KAIYA)  
北海道医療大学・大学教育開発センター・准教授  
研究者番号：50323910  
(H22→H23：連携研究者)

西本 太 (NISHIMOTO FUTOSHI)  
総合地球環境学研究所・研究員

研究者番号：60442539  
(H22→H23：連携研究者)

池田 光穂 (IKEDA MITSUHO)  
大阪大学・コミュニケーションデザインセン  
ター・教授  
研究者番号：40211718  
(H22→H23：連携研究者)

吉田 匡興 (YOSHIDA MASAOKI)  
桜美林大学・非常勤講師  
研究者番号：70468429  
(H21→H22：連携研究者)